甲子園大学紀要　No.39, 029－034（2012）

学生相談におけるグループ・ワークの立ち上げを通しての協働についての一考察

髙橋　紀子

平成23年10月31日受理

The nature of collaboration: the cases of establishment of groupwork activities in a university

Noriko Takahashi

要約

本稿では、二つのグループワークの立ち上げの事例を通して、学生相談室における教職員との協働のあり方について検討した。具体的には、心的避難所や居場所作りとしてのグループワークと、野菜作りのグループワークでの教職員との関わりの比較を通して、グループと教職員との関わりが形成されるプロセスに注目した。両方のグループワークにおいて、初期の段階での具体的なグループへの関わりが、その後長期的にグループを見守る体制作りのきっかけや基盤になりうることを指摘した。

キーワード：学生相談、グループ・アプローチ、協働

英文要約

The nature of collaboration between the counselor and faculty/staff in a university counseling center was examined, through two cases of establishment of groupwork activities. Specifically, interaction between the counselor and faculty/staff were compared between a case of groupwork for providing psychological safe haven or sense of belonging and groupwork for vegetable gardening. Attention was given to the process of forming relationships with faculty/staff, while making preparations for the group. It was also noted that for both cases of groupwork activities, specific involvement toward the group could in the long run become the foundation of, or provide the opportunity for the formation of the structure for caring for the group

Keywords：Student Counseling, group approach, cooperation

Ⅰ　問題と目的

我が国では、2007年に独立行政法人日本学生支援機構から「大学における学生相談体制の充実方策について―『総合的な学生支援』と『専門的な学生相談』の『連携・協働』―」という報告書が出された。この報告書の基本的考え方について、高石（2009）は次の4点にまとめている。

①学生支援・学生相談は教育の一環であり、すべての教職員と専門家（カウンセラー等）との協働によって実現される。

②多様な学生の個別ニーズに応じた学生支援を提供できるよう、大学全体の学生支援力を強化する必要がある。

③各大学の個性・特色に合った、全学的な学生支援体制を整備することが期待される。

④それらがうまく発展するためには、「統括」機能が重要である。

このように、学生相談が対象とするのは悩みを持ち支援を求める特定の学生ではなく在籍する全学生である。また同時に個々のニーズへの対応も必要とされ、その実現の為には教職員と一緒に各大学独自の支援体制を作ることが求められている。

関係者がお互いに連携協力しながら健康増進に努める取り組みは、2003年5月に施行された「健康増進法」に伴い本格化した流れもある。国や地方自治の各種機関と同じく、大学においても学生相談室や健康科学センター等が中心となって大学生および教職員の健康支援のあり方を構築するニーズと期待は高まっているといえよう。

無論、大学における健康支援については、これまでも新入生の精神状態（一宮他,2003）や健康教育（宮田他,2007）、そして実習におけるストレス対処（時田他,2009）、喫煙予防（神田他,2005）等、これまでに多くの実践と研究が蓄積されてきた。

しかし、こうした支援をひとつの仕組みとして大学全体で取り組む際、ひとつひとつをパラパラと提供しっぱなしになってしまう可能性もある。また、健康とは元来提供するものではなく、当事者ひとりひとりの自覚と日常的な取り組みによって維持されるものである。ゆえに健康支援のあり方を考える上でも、支援を一方的にもしくは単発に提供するのではなく、その支援活動をきっかけとし、当事者自身の意識の向上や取り組みの促進が促されるよう見守ることも大切になる。

大学での健康支援を一方的で単発のものとしないためには、支援を提供する側が支援を受ける者にとって、より日常性の高い、つながりを感じられるものとして認識されることも有効であろう。支援を提供する側と受ける側が2つに分類され存在するのではなく、状況に応じてお互い支え合うような関係があれば、普段から馴染みのある機関・人からの働きかけのひとつとして健康支援が行われることとなり、学生や教職員も、そこでの体験や学びを、より日常とつながりのあるものと認識しやすくなると思われる。また、学生相談室にとっても、学生や教職員との日常的なつながりを持つことで、健康支援の効果やフォローを、より円滑に実施できる利点がある。

とはいえ、多くの学生や教職員にとって、学生相談室や健康科学センター等の学内にある支援機関は、健康診断等を除くと自分や身近な人が怪我や病気で不調となった時にはじめて自発的に利用する場となりやすい。不調を感じない時は疎遠になりやすく、結果的に多くの学生や教職員にとって学内の支援機関は日常生活とは離れた存在になりやすい。

このことから、大学の学内の支援機関が健康支援を行う際、まずはできるだけ多くの学生や教職員と普段からつながりを持てる構造を意図的に作る仕掛けが意味を持つと思われる。つまり、支援を作るプロセスから学生や教職員とつながること、そして、支援する側とされる側と関係を一方通行にしない為に相互に支援し合う関係を継続的な活動を通じて構築することが、大学における健康支援を活かす基盤となるのである。

本稿では、学生相談が学生や教職員とのつながりを保ちやすくなることと相互に支援しあう関係づくりを目的に運営した2つのグループワークの立ち上げを事例として取り上げる。これらの事例を通して、学生相談における協働について検討することを目的とする。

Ⅱ　事例の概要

1. 事例の背景

まず、グループワークを実施したキャンパスの構造等、事例の背景について説明する。

1) キャンパスの構造

文系の学部が3つある全校生徒2000名あまりの大学で、同じ敷地内に短大もあった。学生相談は大学と短大の両方を対象とする。

2) 学生相談室の構成

室長1名、非常勤相談員が3名、受付事務が1名

3) グループワーク活動前の学生相談室の状況

個別相談希望が多く、予約が取りにくい状況であった。相談員達は昼休みもない程に相談対応に追われていた。

4) 筆者の大学における位置づけ、立場

大学の職員。学生相談の常勤相談員。これまで非常勤相談員で構成されていた学生相談におけるはじめての常勤相談員。

5) 大学からの要請

イベントやグループを沢山企画して、利用したい人が利用しやすい学生相談室にしてほしいとのことであった。相談予約も1、2ヶ月待ちの大盛況ぶりに、「自分は学生相談室に行く程の悩みではない。学生相談室には深刻な悩みを抱えた人が行くところだ」と、来談を遠慮している学生も多い様子であった。

2. 事例1「楽庵」

1) グループ立ち上げの背景

キャンパスの端に学生相談室は設置されていた。個別相談をする学生にとっては来談を他の学生に見られることも少なく利用しやすい場所であったが、カウンセリングや学生相談に馴染みのない一部の教職員にとっては何をしているかわかりにくい状況も作っていた。また、学生の間でも学生相談の相談予約の多さは

ある程度知られており、学生相談室は深刻な悩みや重篤な状況の人たちが利用するところという認識もあるようだった。

そこで、個別相談の機密性は確保しつつ、他の教職員とつながりやすい機会を設ける必要性、そして、個別相談を遠慮する学生を対象とした心理支援活動を検討することとなった。

2) グループのねらい

学生相談室とは離れた場所に学生や教職員が一息つける場を作る目的で、敷地内にある日本家屋を活用した。教職員に対しては、「学生や教職員がのんびりごろごろ過ごす場所」と説明し、場の名前についてアイデアを募り、「楽庵（らくあん）」と命名した。楽庵に置く漫画や本の推薦・寄付を大学教職員に募った他、座布団や暖房器具の設置などその都度、協力者を求めた。「楽庵」という場そのものだけでなく、その場を作るプロセスを活用して教職員と学生相談室のつながり作りを狙いとした。

3) 構造

(1) 対象：学生、教職員

(2) 日時：月・火・金の昼休み、木曜14:40-16:00

(3) 参加方法：事前申込み不要

4) 実施までの過程

(1) 場所の選定

上記の経緯から、年に数回茶道などのイベントに利用される池の側にある日本家屋を利用してグループワークを企画することにした。この日本家屋は、他の空き教室に比べ、池や日本家屋などキャンパスの中で非日常性を感じやすい場であることから、学生相談の活動に適していると考えられた。また食堂の裏側という立地は、休み時間にふらっと立ち寄りやすい位置であった。

(2) 名称の検討

グループの名称については、大学の風土や学生の雰囲気を知り、かつグループの目的を共有できる非常勤相談員に案を求めた。その結果、グループは「楽庵（らくあん）」と名付けることに決まった。

(3) 本、漫画、絵本等の選定

学長に文章のチェックをしていただいた上で、どのような本や漫画、絵本を置いたらいいかを教職員全員に尋ねるメールを配信した。主に臨床心理を専門とする教員から返答があった。

(4) 備品の寄付

次に、楽庵に置く本や漫画、ゲームの寄付を学生課を窓口に求めた。主に職員から本や漫画を寄付していただいた。また、座布団や扇風機などの備品については、学生課と総務課に相談し、当面は学内で余っているものを利用させていただくこととなった。

(5) 試験的なグループの実施

最初は週に2回、昼休み限定で試験的にグループを実施した。対象は学生の他に教職員も加えた。臨床心理以外を専門とする教員数人が見学に来られた。また、学生は1人で訪れる人が多いこと、そしてそれぞれ遠くに座ることがわかり、座布団やテーブルの配置を変更した。

(6) 実施後の調整

参加者の状況をみながら、実施頻度や時間の調整を行った。また、一人で訪れる学生に対して、一人でいることを保障しつつ、グループとしてのつながりや安全性が確保できるよう、入室時と退室時には筆者と顔を合わせる構造を作る等随時調整した。

5) グループの様子

開室時間中は、利用者がいつでも行き来できるようにした。利用時間は、3分～60分とそれぞれであるが、20分程度の滞在が最も多かった。滞在中は、ぼーっと過ごす方が一番多く、漫画、仮眠が続く。利用者間では積極的にネットワークを作る動きはみられない。むしろ知り合い同士が鉢合わせした時も違う部屋を利用する等、対人関係から少し離れ休息する傾向が見受けられた。筆者は楽庵の管理人として開室中在席した。

楽庵で個人相談は行わなかったが、楽庵の利用をきっかけに個別相談等他の支援へつながるケースもみられた。

3. 事例2「クラブおやさい」

1) グループ立ち上げの背景

事例1「楽庵」が一定の軌道にのったものの、1人で過ごす学生が中心で、よりエネルギーの高いメンバー同士のインタラクションのあるグループ・アプローチにもニーズがあるように思われた。また、学生相談では短大も対象としているものの、筆者は大学の所属というのもあり短大の教職員との接点を持ちにくい状況があった。そして、必修科目の多い短大生は、個別相談の日程が合わないことも2，3回続いた。そこで、時間的制約が少ないオープンな構造で、メンバー同士のインタラクションがあり、短大の教職員とつながりを持てる機会を検討することとした。

2) グループのねらい

学生や教職員と育む共通体験の機会を持つことを目的に、「クラブおやさい」と命名し、大学敷地内で学生や教職員と野菜作りを行った。野菜作りの過程から収穫まで、積極的に学生や野菜作りの経験のある教職員に相談し、このプログラムが学生相談室内で行われているものではなく、より開かれたものになるよう心がけた。

3) 構造

(1) 対象：学生、教職員

(2) 日時：週に1度、筆者が草むしり等する時間設けたが、誰でもいつでも世話や収穫をして良いとした。野菜の様子は週に1度ブログに掲載した。

(3) 参加方法：事前申込み不要

4) 実施までの過程

畑のできる敷地と花壇として作られたスペースに空きがあった。畑のできる敷地は、長年短大の授業や先生方が利用しているとのことだったので、空いている花壇で畑作りをすることにした。こうした畑の選定や作る野菜については、ブログで経過を随時掲載し、学生相談のサイトにリンクを貼った。作りやすさを第一に作る野菜を決め、材料を揃えた。

この活動は、原則的に畑で現場集合し現場解散とした。また活動時間以外も畑で水やりや草むしりをすることにした。正規の活動時間以外に学生が畑にいる時に、長年畑作りをしている教職員と学生の間で交流がうまれ、徐々に広がっていった。もともと短大では学生と教員の交流の機会が多いようで、畑作りに集まっていたのは大学生であったが、彼らにとってもそうした密な教員との関わりは新鮮であるようだった。

5) グループの様子

筆者が畑に行く時間に合わせて野菜の世話をする学生は固定メンバーであった。しかし野菜の経過を話題のきっかけに教職員と話をする機会が増え、相談業務の連携がよりスムーズになった。また、野菜作りの素人である参加者達を見かねて、学生や教職員よりアイデアをもらう機会がたびたびあり、常に支援する側であった学生相談員スタッフである筆者が、学生や教職員に野菜作りを支援される立場にもなった。

Ⅲ　考察

今回事例としてあげた2つのグループワークは、筆者が退職した後5年近くたった今も、後任の常勤相談員の運営の元で継続されている。こうしたグループワークの実施が教職員とのつながりを深め協働体制を作る上でもっとも良い方法であるとまでは論じることはできないものの、それが長く教職員の支えの元で少しずつ変化しながらも継続している事実は、これが協働体制を作る上である程度効果のある方法のひとつとして提示することはできるように思う。

学内に支援する場を点在させる工夫は、既に規模の大きい大学を中心に実施されている。しかしそうした「場」

は、客観的には完成された場やグループ構造をキャンパスの中に置くもしくは実施する行為であることが多い。事例1の<楽庵>では、「場」を作る過程から積極的に教職員の協力を求め、この場が自分達で作った自分達の場であると認識できるよう工夫した。グループ立ち上げから積極的に多くの人と関わる機会を作ることで、学生相談室を利用したことのない学生や教職員にとってもアクセスしやすい環境となり、相談機関としての守りは維持した上で、より日常的なつながりを持てるようになった。多くの人々と関わりながらも、楽庵が大学の中で少し非日常的な場として機能できた要因は、協力を求める範囲を、非常勤相談員、臨床心理を専門とする教員、職員、臨床心理以外を専門とする教員、学生、と段階的に広げていった効果であるともいえよう。これは当初それほど意識化されていたものではなかったが、広く協力や意見を求めても、その内容によってそれぞれの関わりやすさは異なることがわかった。

なお、グループ自体は静かな事例1<楽庵>が、それを支える教職員との関わりは多層的でかつ活発に行われたのに対し、活発で相互交流の多い事例2<クラブおやさい>での教職員との関わりは、ポイント毎に積極的な関わりはあったものの、基本的には畑以外の場所で雑談のひとつとなることのほうが多かった。つまり、「何かをする」という意味では事例1<楽庵>のほうが関わりやすく、「話題にしやすい」という点では事例2<クラブおやさい>のほうがわかりやすい活動だったといえる。

こうした傾向から、学生相談が主催としたグループワークで教職員との協働を想定する場合、教職員が「継続的にグループを見守る」ことが長期的な関わりとしては主となり、そのきっかけとしてグループ立ち上げや初期での行動の伴う関わりがあると推測される。つまり、常に教職員が学生相談の相談員と一緒に同じ活動をする必要はなく、活動の目的と様子にある程度の理解が共有されれば、後は見守り見守られる関係の元で、グループがキャンパスに根付いていくのである。

また、事例2の<クラブおやさい>では、野菜作りを通して、お互いに意見を出しあい支援し合う関係を学生や教職員と作るきっかけとなった。学生や教職員と共に野菜の成長を見守る体験は、学生の成長を共に見守り試行錯誤する経験を比喩的に体験する機会であったようにも思う。野菜が育つ過程を開かれた場所で見守り関わる体験は、学生相談が病を抱える学生を支えると同時に学生が心的に成長する力を支える場であることを知っていただくきっかけとなるかもしれないと思われる。

なお、今回あげた2つの事例は、これを企画した筆者が大学にとってはじめての専任相談員であることも影響していると思われる。学生や職員の多くは大学の学生相談室の専任相談員がどういう仕事をするのか知らない人がほとんどであった。そのためさほど先入観を持つことなく、それぞれの活動に協力し関わることができた可能性も高い。とはいえ、どのような大学の規模であったとしても、支援を行う際に完成されたパッケージを提供するのではなく、その支援を行う段階から学生や教職員と協働することで、その支援内容をより日常性の高いものと捉え、利用しやすくなると思われる。田嶌(1995,2001)は、「動く→(反応をみる)→見立てる→動く→」と動きながら見立てる、あるいは「動いてもらう→(反応をみる)→見立てる→動いてもらう」と動いてもらいながら見立てるという姿勢は、とりわけスクールカウンセリングなどではひときわ有効であると述べた。学生相談において教職員との協働を考える時も、この姿勢は有効であるように思う。少しずつ関わりの輪を広げ確かめながら作りあげる姿勢が、無理のないグループワークをキャンパスの中のひとつの機能として根付かせる上で有効であると思われる。

以上、本稿では、学生相談でのグループワークの立ち上げを題材に、教職員との協働のあり方について検討した。実践しながらの気づきを中心に記述したものであるが故、いくつかの可能性を提示するに留まるのが本稿の限界である。今後、インタビューやアンケート調査などを通じて教職員側からの意見を聞くことは必要であろう。また、他のアプローチとの比較を通して、協働のあり方についてそれぞれの長所と短所、そして留意点を整理していくことで、より実践的に応用可能な知見が形成されると思われる。

文献

一宮厚,馬場園明,福盛英明(2003)大学新入生の精神状態の変化-最近14年間の質問票による調査の結果から,精神医学,45(9),959-966.

神田清子,石田順子,反町真由,狩野太郎　保健学科学生の喫煙状況と喫煙知識に関する調査,群馬保健学紀要25,85-91.

宮田留美,立浪勝,宮元芽久美(2007)健康教育のための基礎調査,富山大学芸術文化学部紀要2,122-129.

田嶌誠一(1995)密室カウンセリングよどこへゆく.教育と医学,43(5),26-33.

田嶌誠一 (2001) 事例研究の視点—ネットワークとコミュニティ ,臨床心理学,1 (1),67-75.
高石恭子 (2009) 現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援,京都大学高等教育研究 15,79-88.
時田 純子,島袋 香子 ,高橋 真理 (2009) 看護女子学生の臨地実習におけるストレス対処とライフスタイルが月経随伴症状に及ぼす影響,母性衛生 50 (1),71-78.